

土砂災害は、おもに大雨によって大量の土や岩が勢いよく崩れ落ちる現象で、一瞬にして多くの命や家などの財産を奪ってしまう恐ろしい災害です。命を守るためには、早めの避難が大切です。

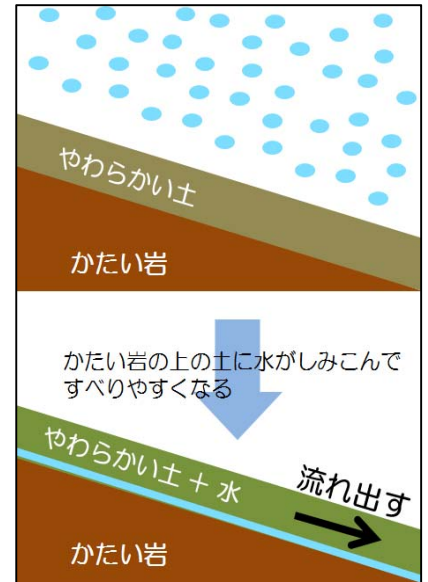
①土砂災害が発生する仕組み



雨の日に土の地面を歩いて、ぬるっとすべったことはないでしょうか。地面に雨がしみこむとすべりやすくなります。このことが、土砂災害の発生とも関係します。

がけの斜面の上の土砂は、ふだんは土と土や土と岩がしっかりかみ合っただけで崩れません。しかし、大雨が降ると地面に水がしみこんですべりやすくなるので、土砂が流れ出します。これががけ崩れです。

そのような土砂が溪流に流れ落ちるなどして多くの水と一緒に下流へ押し流され、土石流となります。大雨で溪流の水量が増えて、川底にたまった土砂などが一気に押し流されてできる土石流もあります。



地面の下には、しみこんだ雨がしばらくたくわえられますので、大雨が降った後の数日間、少しの雨でも土砂災害が発生するおそれがあります。

②住んでいる地域の危険度をチェック



がけ崩れや土石流のような土砂災害は、発生場所や発生時刻を正確に予測することが難しい現象です。一方で、土砂災害によって被害が発生しやすいおおよその場所はわかっていますので、まずはそれを確認しましょう。

土砂災害が発生した場合に命などに危険が及ぶ区域を「土砂災害警戒区域」や「土砂災害特別警戒区域」といいます。住んでいる地域が土砂災害警戒区域などに指定されていないか、避難場所や避難経路を含めて土砂災害ハザードマップで確認しておきましょう。ハザードマップは市町村が公表していて、インターネットでも確認できます。

③命を守るための避難行動

斜面から小石がぱらぱら落ちる、わき水がにごる、溪流が急にごる、雨が降っているのに水位が下がるなどの現象は土砂災害の前兆現象です。



このような現象がある場合には、がけの斜面の中や溪流の上流ではすでに何か異変がおこり始めているため、すぐに避難が必要です。そのほか、市町村から避難勧告などが出された場合には、それにしたがってください。

土砂災害から命を守るためには、早めに土砂災害警戒区域の外へ避難することが大切です。もし、激しい雨や暴風などでやむを得ず避難できない場合は、2階でがけの反対側の部屋など少しでも安全な場所に移動しましょう。

✓ 家族で話しあってみましょう

土砂災害警戒区域などに住んでいる場合

命を守るためには自主避難も重要です。市町村からの避難情報を待つだけでなく、早めの避難も検討してください。雨の予報があったら、下のような気象情報に気をつけて、自主避難を判断する参考にしてください。

ア) 大雨注意報が発表されたら

夕方に発表中の大雨注意報に、夜間～翌日早朝までに大雨警報発表の可能性が高いと書かれている場合があります。このような場合には、夜間に避難が必要となる可能性も考えて準備しましょう。体の不自由な人など避難行動に支援が必要な人は、早め早めの避難を心がけます。

イ) 大雨警報（土砂災害）が発表されたら

いつでも避難できるような準備が必要です。また、気象庁ホームページで公開している土砂災害警戒判定メッシュ情報を見ると、お住まいの地域を含む範囲が大雨警報の基準に達しているかを確認できます。大雨による影響の程度がわかりますので避難を判断する参考になります。

ウ) 土砂災害警戒情報が発表されたら

命の危険がある土砂災害がいつ発生してもおかしくない状況です。土砂災害警戒区域などの外の少しでも安全な場所へ避難するよう心がけてください。この場合も気象庁ホームページの土砂災害警戒判定メッシュ情報で、住んでいる地域を含む範囲が土砂災害警戒情報の基準に達しているかわかりますので、避難を判断する参考にしてください。

洪水害とは、川から水があふれでて、建物や道路などが水浸しになる災害のことで、おもに大雨のときに、川の水位が堤防の高さをこえたり、川の激しい流れによって堤防が破壊されることで、洪水害となります。

① 日頃の準備

想定されている洪水によってどこが水浸しになるか、その深さはどのくらいなのか、市町村がインターネットなどで公開している洪水ハザードマップを調べてみましょう。洪水ハザードマップでは、避難場所も確認できますので、そこに行くまでの安全な道順も考えておきましょう。



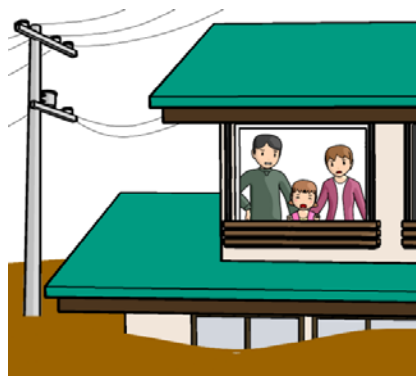
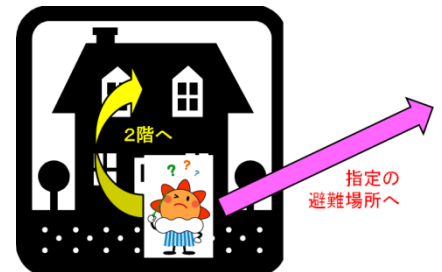
あわせて、非常食、懐中電灯、携帯ラジオなどをまとめて、いつでも持ち運べるようにしておくことも重要です。

② 避難場所などへ避難するか、2階へ避難するか

洪水害から命を守るための避難について考えてみましょう。

すぐに思いつくのは指定の避難場所などへ避難することです。しかし、大雨で道路が水に浸かっていたり、暴風が吹く中を出歩くことは大変危険ですので、避難場所へは早めに避難することが重要になります。

洪水ハザードマップで、2階以上の高さまで浸水が想定される場所や、堤防の近くで建物自体が流されるおそれのある場所などに住んでいる場合は、洪水害が発生したときに家の中には命の危険があります。大雨となるおそれがある場合は、大雨や暴風で出歩けなくなる前に指定の避難場所などへ早めに避難することを心がけましょう。



想定される浸水があまり深くない地域で、家が2階建て以上であれば、2階への避難（垂直避難）という選択もできます。この場合は暴風が吹くような出歩けない状況でも命を守れます。

想定される浸水の深さや自宅の状況などを確認して、いざという時の避難について家族のみなさんと相談しておきましょう。

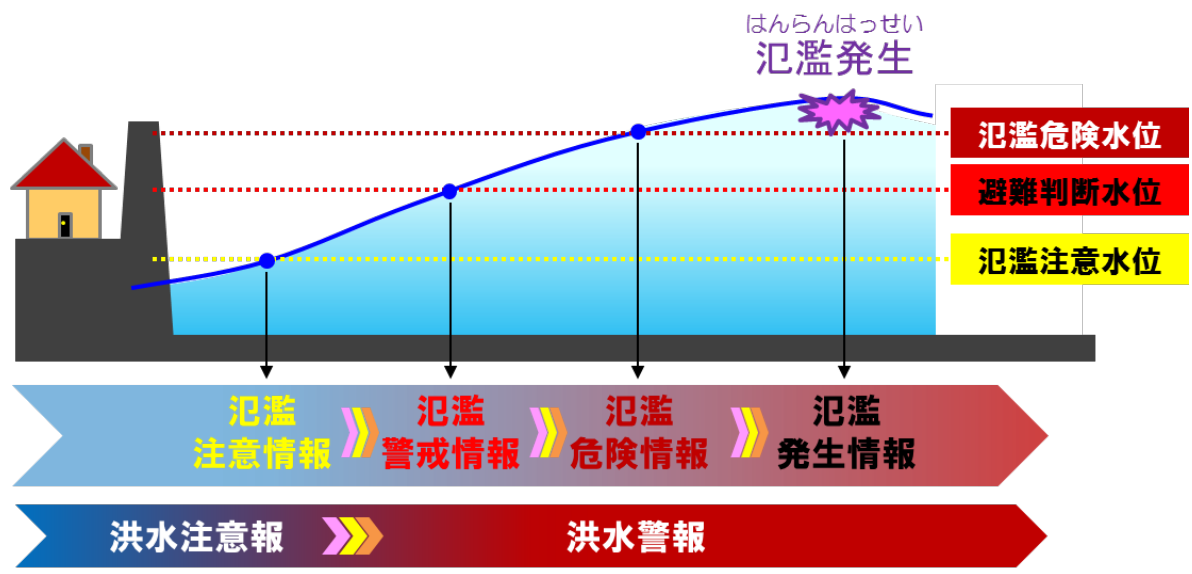
③ 防災気象情報の種類

洪水が予想される場合は、気象台では1日ほど前から「大雨に関する気象情報」を
 発表します。半日ほど前には「洪水注意報」を、洪水のおそれが高まる2～3時
 間前には「洪水警報」をそれぞれ発表します。

そのようなときは、川や水の集まる低い土地にはけっして近づかないでください。



さらに、指定河川洪水予報という情報もあります。
 洪水害によって重大な被害が発生するおそれのある大きな川などをあらかじめ決
 めておいて、その川の水位や今後の予想を発表するものです。



ここで紹介した情報は、テレビや気象庁ホームページなどで確認できます。

④ 避難の目安 ～ 命を守るために

川の水位の状況や堤防の状態から洪水害のおそれがある場合には、市町村が避難勧告などを出します。避難勧告などが出るような場合は、命の危険が迫っていますので、すみやかに避難しましょう。



ただし、②で説明したように、指定の避難場所などへ避難するのと2階へ避難するのと、どちらがよいかを選択することも大切です。

また、指定の避難場所などへ自主的に避難する場合には、指定河川洪水予報の「氾濫危険情報」のタイミングが避難の参考になります。体の不自由な方など避難行動に支援が必要な方は「氾濫警戒情報」のタイミングを参考に、早め早めの避難を心がけてください。